

律法と律法主義

マタイ5:13~20 / 李正雨師

私たちのような一般の人々は、法律についてよく分かりません。それで知っている限りは守ろうと思っ
ていますが、分からないので守れない場合も多いのです。私も日本の交通についてよく知らないまま運転して、
反則切符をたくさん渡されました。おまわりさんは、私の違反について親切に説明してくれましたが、違反
を見逃したことは一度もありませんでした。おかげ様で、高いお金を払いながら、交通についてよく学ぶこ
とができました。一般の人々にとって法律というものは、近いですが、なじみのないものだと思います。し
かし、守らなければならないこと、知らなければならないことだと思います。私たちの信仰生活の中にもこ
のような法律があるでしょう。まさに律法というものです。先週の福音書で、イエス様は「わたしが来たの
は律法や預言者を廃止するためだと思っただけではない。廃止するためではなく、完成するためである」と言
われました。イエス様が言われた「律法の完成」。これは何でしょうか。私は、これが律法の本来の意味を
明らかにすること、律法について正しく教えてくれることだと思います。

当時の人々、特に信仰が深い人々は、律法、神様の言葉を文字通り守ることが重要だと思いました。それ
で、律法の基準となる十戒をどうすればよく守れるかを研究し、十戒を守るために、各戒めによって数多く
の法律を作り出しました。例えば、安息日の戒めを守るためには、どうするのが安息日の戒めを守ることに
ついて、39項目の法律を作り出しました。これをメラチャ (Melacha)、創造的な活動と言いますが、これ
は、安息日にはしてはならない39項目の労働を指すことです。この中には、畑の仕事や洗濯のように体を動
かすこともありますが、ともし火をつけたり、消したりすること、文字を2つ以上書いたり、消したりするこ
となどもありました。それで、イエス様が安息日に病人を癒されたとき、律法学者とファリサイ派の人々が
強く批判したのです。

このように律法を守ることだけに没頭したので、律法の意味はますます薄れていきました。そして、なぜ
神様が律法を与えてくださったのかではなく、どうすれば律法を守ることができるのかを悩んだ神の民たち
は、律法を守ることによって自分の義、正しさを探しました。これによって福音書で登場したファリサイ派の人々
や律法学者たちは、いつも律法を守ることによってイエス様と議論し、律法を守っている自分たちを義人だと思
いました。このような事柄は、福音書全般にわたってよく現れています。その中でも、ルカによる福音書18章
のファリサイ派の人の祈りは、当時のユダヤ人たちが律法を守ることによってどれほど敏感だったのかを私たちに
示しています。ルカによる福音書18章のファリサイ派の人の祈りは、次のようです。「ファリサイ派の人は
立って、心の中でこのように祈った。『神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦
通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。わたしは週に二度断食し、全
収入の十分の一を捧げています。』」

この祈りを一度よく考えてみてください。ファリサイ派の人の祈りに中心となるものは何でしょうか。ファ
リサイ派の人は、自分はどんな者なのか、自分が何をして守っているのかを神様の御前で表しています。この
ような祈りができたのは、律法を守ることが信仰を代弁したからだと思います。そしてイエス様がこのファ
リサイ派の人の祈りをおっしゃったのも、当時の信仰の姿がこのようであったからだと思います。律法を守っ
ているかそうではないか。これが信仰の基準だったのです。しかし、イエス様は今日の福音書で律法を守るとい
うことがどれほど無駄なことかを言われます。今日の福音書は「殺してはいけない、姦淫してはいけない、誓
ってはいけない」という内容で書かれています。この3つの言葉は、すべて十戒の言葉であり、律法の基準と
なる言葉です。そして、イエス様は弟子たちに、この3つの戒めについて言われましたが、戒めを守りなさい
ではなく、戒めの意味について言われます。

まず、イエス様が最初に言われた「殺してはいけない」という戒めから見てみましょう。イエス様はこう
言われます。「あなたがたも聞いているとおり、昔の人は『殺すな。人を殺した者は裁きを受ける』と命じ
られている。しかし、わたしは言うておく。兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。兄弟に『ばか』

と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、火の地獄に投げ込まれる(21～22節)。」皆様、この言葉はいかがですか。本当に怖い言葉ですね。他の人に腹を立てなかった人は、一人もいないと思います。しかしイエス様は、なぜこのような言葉を、しかも厳しく言われたのでしょうか。私は、この言葉が強調の意味を持っていると思います。そして強調のために、イエス様は少しは誇張しておっしゃったのだと思います。

殺すことと腹を立てることは、同じではないでしょう。しかし、私たちが忘れてはいけないのは、殺人のほとんどが腹を立てることから始まるということです。そして腹を立てるとは、原因があったということであり、その原因に報復するために悪口を言って、腹を立てるのです。時には、物理的に報復することもあります。これは、人の本性であり普遍的なことだと思います。しかし、神様は私たちがこのような本性から離れることを望んでおられると思います。他の人に悪口を言って、腹を立てて、悪によって返すのではなく、主が与えてくださった愛によってお互いに愛し、許すことを望まれるのです。サタンは私たちの心を動かして報復するようにさせますが、これを治めるということが私たちに向けられた神様の御心です。ですから、殺してはいけないという戒めは、単に「殺人」についてのことだけではないと思います。隣人を憎み、報復しようとする心も、この戒めに違反するのです。ですから、イエス様は、供え物をささげる前に、まず行って兄弟と仲直りをし、それから帰って来て、供え物をささげなさい(23～24節)とおっしゃったのだと思います。私たちが心の中の怒りを治めることができるように、この戒めの意味を正しく実践することができるように、イエス様は殺人についての戒めを厳しくおっしゃったのです。

次の戒めである姦淫についての言葉も同じです。単に「私は姦淫したことがない」ということで、自分の正しさを立てることができるわけではありません。これは夫婦の生活についてのことです。当時の社会では、夫が家庭の絶対権力を持っていました。だから、他の女が気に入った場合、自分の妻に離縁状を渡して離婚することができました。そしてその女と気楽に結婚することができました。しかしイエス様は、これが姦淫だと言われました。神様の目にも、正しくなかったことだからです。結婚と家庭は、神様がくださった最高の贈り物です。ルターも結婚は聖職よりも貴重で、権力者の職務よりも貴重だと言いました。このような家庭を軽んじて思うこと、他の人のことが気に入って離婚を決めること、これも戒めを破ることになるのです。

誓いについての戒めも、このような文脈で解釈することができると思います。誓いというものは、果たして私たちクリスチャンに必要なものでしょうか。私たちが神を恐れて言葉が重要であることが分かったら、誓うことは全くないでしょう。特に信仰の中ではさらにそうです。信仰こそ良心と深く関係があるものでしょう。ですから何かをかけて誓いをすることは、自分の信仰を軽く思っている態度だと思います。それで37節の言葉のように、私たちは「『然り、然り』、『否、否』」という方が良いと思います。私たち信仰の人は、言葉の重さをよく知っているからです。この世界も言葉によって創造されたことを忘れてはいけません。

詩編1編によると、「いかに幸いなことか、主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ人」と書かれています。ここでの主の教えは律法を意味します(NIV、口語訳聖書)。もし律法が守るものだとすれば、果たして律法を愛したり、昼も夜も口ずさむことができるのでしょうか。この律法の意味が私たちに向けた神様の御心と愛なので、私たちは律法を愛し、昼も夜も口ずさむことができるのだと思います。守るための律法は、律法主義の方に行ってしまう。ですから、イエス様は律法の意味、なぜ私たちに律法が与えられたのかを、今日の福音書を通して教えてくださったのです。律法に現れた神様の御心が皆様のことを導いてくださいますように。イエス様によって神様の御心を悟り、私たちを通して神様の御心が現れますように、主の御名によって祈ります。アーメン